書　評

佐藤八寿子 著

『ミッション・スクール：あこがれの園』

渡　部　　充

「ミッション・スクール」、「甘美にして荘厳、瀟洒にして高尚、なんとも不思議な響きがある」と著者は言う（4）。なるほど、評者のように小学校から大学まで公立校に学んだものには特に、「ミッション・スクール」という言葉に独特のオーラが感じられるものだ。もっとも、評者は長年ミッション系の大学に勤務しており、そうした感覚もかなりのところ麻痺してしまっているのだが。学外の人から「お嬢様学校にお勤めなんですね」などと言われることは今でもよくあることだ。羨望とも、皮肉や嫌味ともとれる（大抵の場合は両者が混じっているのだろう）ステレオタイプな反応には、やはり、これまで日本社会のなかでミッション・スクールに向けられたまなざしのアンビヴァレントなあり方が関係しているのだろう。本書は明治時代の創設期から現在に至るまで、ミッション・スクールの歴史を辿りつつ、そこに向けられた日本人のまなざし、すなわち「ミッション・スクール」イメージの変遷を辿っている。同時に、そうしたイメージによって逆照射される明治以降の日本社会と日本人のあり様を問うているのである。本稿では、まず本書の内容を紹介し、続いて評言を試みることとする。

序章ではミッション・スクールとは何かが論じられる。狭義にはキリスト教の伝道事業の一環として運営される学校を指し、広義にはキリスト教に限らず宗教上の「使命」の実践を意図する学校とされる（7－8）。さらに狭義の解釈

では、(外国の) ミッション (宣教師団) が直接運営に当たる学校ということになる。しかし、一般にミッション・スクールは「キリスト教の学校」という意味で使われており、そのイメージを分析する本書も、そうした広義の意味においてミッション・スクールを捉えている。日本のキリスト教徒は人口比では２パーセント弱に過ぎないが (14)、私立高等学校に占める割合は約16パーセントである (15) など、日本の教育界においてその存在感はかなりの比重を占めている。

第一章では明治時代の「忌避と羨望のアンビヴァレンス」(章題) が論じられる。明治初期のキリスト教に対する排斥運動は厳しいものであった。多くの日本人に邪教とみなされた「耶蘇教」に対する排耶思想、「その前近代的憎悪は、新たに登場するメディアによってスキャンダル仕立ての近代的禁忌として新生することとなる」(32)。そうした明治期のスキャンダルが「不敬罪」を軸に考察される。内村鑑三の「不敬事件」など、「不敬なる基督教徒」(42) が攻撃の対象とされ、恣意的にそうした「烙印」を押されていたのである。興味深いのは、攻撃を受けたキリスト教側からの反論はなかったという点。たとえば、教育勅語の奉読の儀式そのものに対する異議申し立てはなく、不十分なやり方でしかできなかったことに対する弁明のみに終始したという (53)。つまり、こうしたスキャンダル報道は「攻撃者と被攻撃者がともに共同した禁忌の制度化過程、新たなコードの定着過程と見ることができ」、「新しいリスペクタブルな日本国民像を見事に彫琢した」という (53–54)。

スキャンダルによって傷つけられたが、同時にスキャンダルによって「自らを聖化し高めることができた」ミッション・スクールは、その「ハイカラ」さでもって近代的知識人をひきつけていく。社会主義とキリスト教がその「あぶなさ」と「あこがれ」においてよく似たイメージで捉えられるようになり (61)、「教養あるいは知的な文化としての日本的キリスト教観が」生まれる (64)。今日の京都では「三K」といって、ミッション・スクールは「かわいい、金持ち、キリスト教」あるいは「きれい、かしこい、金持ち」と呼ばれるそうである

(74)。著者は入学金および学費のデータを用いて、必ずしもミッション・スクールが金のかかる学校でないことを示しているが、そうしたミッション・スクール＝金持ちというイメージは根強い。日本において、しばしば「ハイカラ」な西洋文化を体現してきたミッション・スクールの帯びている「徴」が「直接経済スケールに反映するものとして語られてきた側面も無視でき」ないのだ (80)。

第二章では、明治・大正から昭和期にかけての小説におけるミッション・スクールの表象が分析される。特にミッション・ガール、すなわち女学生たちの描かれ方である。なぜかミッション・スクール関連の情報は女子にまつわるものが多い。こうしたジェンダー・バイアスがなぜ存在するのか。この問いに答えることが本書の目的でもある。吉屋信子の『花物語』に代表されるような「少女小説」という新たなジャンルが流行した大正期、やはり新たなジャンルとして登場した男性の書き手による「私小説」における「女学生」のイメージはどうであったか。まず大正期の二作品、徳富蘆花『黒い眼と茶色の目』(1914、大正三年) と島崎藤村『桜の実の熟する時』(1919、大正八年) が分析される。徳富は同志社、島崎は明治学院の出身であるが、両作品は、明治期の青春時代、特にミッション・スクールにおける生活を回想した自伝的小説であり、女学生を対象とするプラトニックな恋に破れた主人公が出奔ないし旅に出るという結末を迎えるという共通点をもっている。これら小説におけるヒロインは、「学業・職業達成という、世間一般でいう「立身出世」の道程における大きな障害物」であり、「ファム・ファタル (宿命の女)」として描かれている。タイトルにある「黒い眼」とは主人公が敬愛する新島襄の学問や信仰を象徴する清らかに澄んだまなざしであり、「茶色の目」はこれに対峙する「邪悪にして蠱惑的な存在」を示している (102)。いっぽう、後者のヒロインは主人公の「精進や信仰を妨げる誘惑者」(109) として描かれている。

次にこれら二作品の先駆とも言える明治期の二作品が論じられる。田山花袋『蒲団』(1907、明治40年) の芳子は神戸女学院に学んだハイカラな女学生であり、地方出身の苦学生であった主人公にカルチャーショックを与えることにな

る。田山によれば、彼女は「人間の卑しいことを隠して美しいことを標榜するといふ群れの仲間」(112) の一員であった。こうした「新しい女」に「温順と貞節とより他に何物をも有せぬ細君」(114) が対置され、主人公は前者への恋情に呻吟する。夏目漱石『三四郎』(1908、明治41年) のヒロイン、「アンコンシャス・ヒポクリット」たる美禰子はミッション・スクール出身かどうか不明だが、教会、聖書への言及など、そう思わせる断片が散見する。モデルとされる平塚明子 (雷鳥) は禅宗に傾倒していたが、漱石は「ヒロインを仏教からキリスト教に『改宗』させ」たのである (120)。

第三章では、これら四作品に共通する「ファム・ファタル」としてのヒロイン像の背景が論じられる。「遅れてきた世紀末」である日本の大正期には、欧米の世紀末芸術の受容と流行が見られた。G. L. モッセによると世紀末のファム・ファタルは「男らしさを賞揚する国民化のなかでリスペクタビリティが排除していったユダヤ人、両性具有者、同性愛者と並ぶデカダン派の表象として位置づけ」られるという (123)。ただし、日本におけるファム・ファタルとしての女学生は、例えばハインリヒ・マンの『ウンラート教授』(1905) の描き出すファム・ファタル像とは大きくかけ離れている。後に『嘆きの天使』として映画化されるマンのファム・ファタルは場末の劇場で男を誘惑する女であった。いっぽう、ここで論考の対象となっているミッション・ガールは当時の文壇で流行した「悪女」、「毒婦」、「情婦」、「妖婦」たちとも異なっていた。彼女たちは「キリスト教という空間を主人公と共有しつつ彼の祈りを妨げ、近代的学校教育をうけながらも特別優秀でもないという、極めて矛盾に満ちた存在」だったのだ (137)。それは、急速な近代化を遂げつつあった日本社会において、男たちが刻苦勉励による「立身出世」の道を歩みつつ、自らの「シャッテン (影)」(ユング心理学による) として生み出したイメージではなかったかと著者は言う。近代の立身出世主義の男性と対をなすのは「良妻賢母」の女性だが、男たちが実際に誘惑されたのはむしろ、「良妻賢母」教育ではなく「リベラル・アーツ」教育に重きを置くことの多いミッション・スクール出身の女たちで

あった。「夫は妻に、現実生活の中では良妻賢母のスキルを要求しつつ、イメージの中では『女学校出』を欲望した。『女学校出』であることは、すでに夫の中で消費される記号のひとつとなる。ミッション・スクールのリベラル・アーツは、たとえばお見合いの履歴書のうえで絶大な価値を発揮する記号とな」(171) ったのである。

第四章は、昭和期以降のミッション・ガールの変遷を辿る。石坂洋次郎の『若い人』(1937、昭和12年) の自由奔放なヒロイン江波恵子は、どのヒロインにもましてエキセントリックであるが、同時に無垢な少女 (「アンコンシャス・ヒポクリット」) 性も帯びており、戦前戦後を通じて映画やテレビの中で再生産され続けてきた。戦後の日本社会に最大のインパクトを与えたミッション・ガールは「正田美智子さん」であった。美智子さんをめぐる「ミッチー・ブーム」は同時に彼女が学んだ「雙葉」「聖心」を「インペリアル・ブランド」として輝かせることになる。平成になって現在の皇太子妃となった「雅子さま」もまた、彼女が小学校から高校まで学んだ「雙葉」のブランド価値を高めることになった。しかし現在は、すでに「立身出世」という近代日本における「大きな物語」が終焉してしまった時代である。ミッション・ガールたちがまとっていたファム・ファタルとしての妖しい輝きは薄れ、そのイメージは細分化するサブ・カルチャーの中で断片的に消費されている。雑誌『ＪＪ』などに紹介されるミッション・ガールたちを通して「オッシャレー」で「クラス感」を帯びたイメージが定着する。また1980年代以降のマス化した「少女の時代」(大塚英志) には少女小説や少女マンガにおいてさまざまな形でミッション・ガールたちが描かれてきた。今日人気のある作品としては「『純粋培養』されたシーラカンスのようなヒロイン」(204) が描かれる今野緒雪『マリア様がみてる』などがある。また、「ミッション・スクールという記号が明らかに『笑い』の要素として機能する作品群も登場して」(206) きている。「大きな物語の終焉」のあと、断片化された様々な「小さな物語」のなかで今なお特別の記号性を帯びてミッション・スクールのイメージが再生産され続けているのだ。

最後に簡単な評言を試みたい。最近は月刊雑誌のごとく読み捨てにされるにふさわしい新書が氾濫しているが、本書は読み応えのあるものであった。参照されるデータの豊富さ、漱石からサブ・カルチャーまで、その分析対象の幅広さ、繰り広げられる知見の面白さなど、新書でなくとも一級品の出来栄えだろう。学術誌に掲載された論文を下敷きにしているためか、各章間のつながりがやや悪い印象を与えるところはあった。また、著者が依拠する歴史家ジョージ・モッセのレスペクタビリティ論はある程度詳述されているが、他にも援用されるピエール・ブルデュー、ソースティン・ヴェブレン、ユング心理学などはいささか付け焼きの感がなきにしもあらずである。しかし、そうした小さな瑕疵は本書のテーマの重要性をいささかも損なうことはない。日本におけるミッション・スクールのイメージの変遷を辿るという、一見趣味的ともとれるテーマに、明治期以降の日本人の「国民化」とはどのような過程であったのかという極めて重要な問いが重ねられている。男性中心の立身出世主義がその陰画として描き出したファム・ファタルたるミッション・ガールとは、明治以降急速に流入してきた西洋文化やキリスト教に対する忌避と羨望の感覚があいまって、男たちが生み出した極めて日本的な表象であったのだ。

「あとがき」にもあるように、本書の問いは、「国民」とは、「日本人としての私」とはという古くて新しい問いへと繋がるものだ。それはまた「日本におけるキリスト教とは」あるいは「ミッション・スクールにおけるキリスト教主義／リベラル・アーツの教育とは」といった問いにも繋がるだろう。今日、神戸女学院の学生たちに、かつて花袋を苦悩させたファム・ファタルの末裔としての面影を見ることは難しい。しかしながら、京都における三Kイメージに端的に現されるような、外部から注がれるまなざしが表出する「お嬢様」、「おしゃれ」、あるいは「かわいい」といったイメージは、彼女たちも意識的にせよ無意識的にせよ、一種の社会的・文化的リソースとして援用しているように思われる。本学の学生にも是非一読を勧めたい書である。

（中公新書、2006年９月、本文ｖ＋246頁、本体760円＋税）